

# 連合2020春季生活闘争 中央討論集会

今、問題視しなければならぬのは、働く者すべてにおいてどうなのか、ということだ。5800万人超の雇用労働者すべてにおいて賃上げは実現しているのか。賃上げのうねりは届いているのか。6年間賃金が上がり続けた労働者がいる一方で、賃上げとは無縁の労働者がいるとすれば、それはなぜなのか。この問いかけを、世の中全体の問いかけにしていかなければならない。

解決をはかる最大の力ギの一つは、不合理な「取引慣行」の是正だ。本来、労働条件改善の原資に回っていくべきものが、発注元や一部の大手企業・親企業に留め置かれ、「サプライチェーン全体で生み出した付加価値の適正分配」が阻害されていないか、「働き方」も含めて厳しくチェックしていかなければならない。そして、使用者側への問題提起はもとより、あらゆる機会を通じて社会的にアピールしていかなければならない。

## 底上げの流れを止めない

第2は、底上げの流れを止めないという観点だ。賃金の上げ幅にもこだわりを持ち続け、「2%+2%」の4%の賃上げ要求を引き続き堅持していく。

## 労使関係を拓いていく

この6年間、連合は賃上げを実現してきたが、経済の好循環には到達していない。それは賃上げが日本全体のものになっていないからである。そもそも、私たちの労使交渉の結果においても、要求との対比ではかなりの未達となっているからである。足もとのグローバルな経済の動向は不安定さを増し、一筋縄ではない課題を抱えている業種業態も少なくない。しかし、デフレ脱却に向けて力を合わせてきている中で、その道半ばでの戦線離脱があるとすれば、社会的責任の放棄と言わざるを得ない。それは日本経済の腰折れを招き、政労使の努力を水泡に帰すことに直結する。底上げの流れを絶対に止めてはならない。

## 第3に、労使関係を拓いていく

という視点である。春季生活闘争を推進していく上で、すべての取り組みの土台となるのは、いかに組織的な力を持つ働く仲間を増やしていくのかだ。「やはり労働組合が必要でしょ」「労使関係がなければ問題は解決しないでしょ」ということを、もっと強く世に問いかけていかなければならない。

## すべての働く者のための春季生活闘争

連合に集う私たちの組織自体がさらに力を発揮すべき問題も数多くある。「サプライチェーン全体で生み出した付加価値の適正分配」は、ますます重要な課題になっているが、取り組みはまだ不十分だ。その要因の一つに、サプライチェーンにおける労働組合の不在、労使関係機能の欠

如がある。まずは企業グループ内における組織強化を強化してほしい。組織拡大は、それぞれの職場の「働き方改革」の遂行においても決定的に重要な力ギとなる。労働組合のない企業では、いまだに36協定のなんたるかや過半数代表の選出手続きの正確な知識を持たない経営者が多数存在する。2020年4月には雇用形態間の均等待遇・均衡待遇に関する法律が施行される。「同一労働同一賃金」と言われるこの問題こそ、労使関係がなくていいという対応していけるのか。何が均等で、何が均衡であるべきか、働く者の納得感を得ながらルールをつくっていくには、やはり労働組合が必要であるということを強く強く世に問うていこう。

自己責任論が幅をきかす一方で、将来不安から目をそむける常温社会化が進んでいる。経済の先行きも見通せない。だからこそ私たちは結束し、このような状況に立ち向かっていかなければならない。

春季生活闘争においても、連合に集う一人ひとりのみなさんの思いこそが基盤である。その心意気を世の中にしっかりと示していこう！

# 私たちが未来を変える！ すべての労働者の「底上げ」「底支え」 「格差是正」と働き方の見直しで！



連合は11月6日、「2020春季生活闘争中央討論集会」を開催した。構成組織、地方連合会、関係団体などから480名が参加し、基本構想に基づき闘争方針策定に向けた討議を行った。

## 分配構造の転換に つながり得る賃上げをめざす

主催者代表挨拶(概略)



神津里季生  
連合会長

## 2020基本構想に 込めた思い

2019春季生活闘争では、賃金の「上げ幅」のみならず、これまでの以上に「水準」にこだわる取り組みを展開し、特に中小企業やパート・有期契約等の雇用形態で働く方々の賃金を「働きの価値に見合った水準」に引き上げていくことをめざした。2020春季生活闘争においては、これを引き継ぎながら、従来から掲げてきた「底上げ・底支え」「格差是正」といった概念について、それぞれをさらに明確に定義づけ、「分配構造の転換につながり得る賃上げ」

## 格差是正・底支えを実現する

すべての働く者の取り組みとして

第1に、すべての働く者の取り組みとして、格差是正・底支えを実現すること。連合は、2014春季生活闘争以来6年連続の賃上げを実現し、とりわけ2016闘争以降は「底上げ」を強調して、中小のベアが大手を上回る状況や、パートなど多様な働き方の仲間の時給引上げ率が相対的に優位となるなどの成果をあげてきた。

しかし、これらはあくまでも連合の組織内での傾向である。私たちが

をめざしていきたい。

春季生活闘争はすべての働く者の幸せを実現していくための営みである。65年を数えるその歴史において、過去の枠組みにとらわれることなく、新たな展開をはからなければ目的は達成されない。基本構想に込めたその「思い」を3点に絞って申し述べておきたい。